

# 乗雲

寺報

第110号

1985年4月創刊

R2.8.1 発行

〒959-2646 新潟県  
胎内市西栄町2-8  
TEL0254-43-2419  
FAX0254-43-4560

編集人  
広厳寺  
住職 神田英俊

メール  
otera@kogonji.jp

道元禪師御一代記押絵

木ノ芽峠の別れ



10

建長五年(西暦1253年)の八月、道元さまは波多野義重らのすすめにより静養のため京都へおむかされた。木の芽峠で徹通和尚を越前に帰され、高辻の覚念亭に入られた。いよいよ入滅の時を知ると、身を浄め、坐禅をされて、集まった多くの人に広く真実の仏法を伝えるようにと申されて、しずかに五十四年の生涯を終えられた。建長五年九月二十九日の夜でありました。(終わり)

道元禪師御一代記



「見えなくてもお花を供えたい 食べなくてもおいしい物を供えたい 話さなくても語りかけた い 見えざるものへの真心は美し」

私たちは日常の生活の中で、「お陰さま」という言葉をよく使います。「陰」とは、ご先祖さまの霊を表し、ご先祖さまにいつも守られて暮らしているのだという感謝の意味があります。

戦争時代には戦地にいる息子のために母親が毎日無事を祈り、願いを込めて、「陰膳」してくれていたという話を聞きました。たとえ息子のためにお膳を作ったとしても、食べてくれることもない、有り難いの言葉もない。それでも息子を思い、陰膳をしてくれる、人を思う、その気持ちが大事なことです。

大本山總持寺を開かれた瑩山禪師さまは天皇さまから質問を受けます。「人は亡き父母のため

に靈膳を上げ、お茶湯を供えるが少しも減っていない。それでも供養になるのか」禪師さまは、「梅の花は壁を隔てても匂ってくるが、花の芯は減らない。また、私どもの鼻にも何の跡形も残らない。心を通じるとはまさにこのようなもので、供養とは目に見える変化を期待するのではなく、それは雨露が自然に草木を潤し育てるように、無心に行われるものである。真心さえあれば必ず思い念じる精霊に届くものです。」と答えました。

供養とは、たとえその姿が見えなくても、いつもそばにおわすが如く心を配ることです。食べていただきたい、その心をお供えすることです。

八月はお盆の月です。ご先祖さまがお帰りになります。お仏壇にはお線香、お灯明、お水、お茶等の飲み物、果物、ご飯等の食べ物をお供えし、心を込めてお迎えいたしましょう。また、月命日(亡き人の祥月命日)には「お靈膳」を作り、家族揃ってお参りし、亡き人やご先祖さまに感謝報恩の誠を捧げましょう。

## 令和二年 年回表

「回忌」 「没年」

一周忌	平成三十一年・令和元年
三回忌	平成三十年
七回忌	平成二十六年
十三回忌	平成二十年
十七回忌	平成十六年
二十三回忌	平成十年
二十七回忌	平成六年
三十三回忌	昭和六十三年
五十回忌	昭和四十六年
百回忌	大正十年

▼令和二年(2020)の年回表です。

当寺では個人情報保護の観点から本堂には張り出ししていません。正当各家には昨年十一月中旬に通知していますのでご確認ください。▼日曜・祝日のご法事の申し込みはお早めにお問い合わせください。▼「周」は「めぐる」ことを意味する言葉で、亡くなってからちようど一めぐりした翌年のその日を一周忌と呼ぶ。回忌とは亡くなられた日を最初の忌日と考えて、三回目の忌日が「三回忌」となる。以降は丸六年目が七回忌、丸十二年目が十三回忌となる。